

源氏物語・英訳の比較

(1)「桐壺」の巻より

ピーター・ミルワード先生による抜粋

協力(直訳作成): 江藤裕之先生(長野県看護大学外国語講座(英語)助教授)

[原文] たまがみたくや 玉上琢彌訳注『源氏物語』(角川ソフィア文庫, 1964)から引用。藤原定家の青表紙本が底本。
[谷崎] 谷崎潤一郎訳『源氏物語』(中央公論新社, 1973)から引用。谷崎潤一郎の3回目の現代語訳(新々訳)。
[Waley] (ウェイリー) Arthur Waley, tr. The Tale of Genji(1935), 《1.Kiritsubo》
[Seidensticker] (サイデンスティック) Edward Seidensticker, tr. The Tale of Genji(1976), 《1.The Paulownia Court》
[Tyler] (タイラー) Royall Tyler, tr. The Tale of Genji(2001), 《1.The Paulownia Pavilion(Kiritsubo)》

【訳の対比】

a. [原文]「限りあらむ道にも、おくれ先^{さき}だたじと契らせ給ひけるを、さりとも、うち捨ててはえ行きやらじ」

[谷崎]「死出の旅路にももろともという約束をしたものを、まさか人を打ち捨てて行くことはできないであろうに」

[Waley] Emperor: "There was an oath between us that neither should go alone upon the road that all at last must tread."

(直訳)最後には二人して歩んで行かねばならない道程を、私たちのどちらも一人きりでは行かないようにしましょうという誓いが私たちの間にありました。

[Seidensticker] "We vowed that we would go together down the road we all must go. You must not leave me behind."

(直訳)私たちが二人で行かねばならない道は一緒に行きましょうと誓いました。あなたは、私を置き去りにしてはいけません。

[Tyler] "You promised never to leave me, not even at the end, and you cannot abandon me now! I will not let you!"

(直訳)あなたは決して私のもとから去らないと約束した。たとえ、終わりのときでも。だからあなたは今私を見捨てることはできない。私はあなたにそうさせない。

- b. [原文] 「かぎりとして別るゝ道の悲しきにかまほしきは命なりけり
[谷崎] 「限りとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり」

[Waley] Lady K.: "At last! Though that desired at last be come, because I go alone how gladly would I live!"

(直訳) その「最後」なのです。そこまで望んだ「最後」がやってきたようですが、私は一人でいくため、もし生きることがかなうならどれだけ嬉しいことでしょう。

[Seidensticker] "I leave you, to go the road we all must go.
The road I would choose, if only I could, is the other."

(直訳) 私はあなたのもとを去ります。そして、私たちが二人して行かなければならない道を行います。本当にできることなら、私が選びたい道は、もう一つの道なのです。

[Tyler] "Now the end has come, and I am filled with sorrow that our ways must part:
the path I would rather take is the one that leads to life."

(直訳) さあ、今、その終わりが来てしまったのです。そして、私たちの道が分かれなければならないことを思うと、悲しみでいっぱいになります。私が、むしろ取りたい道は、生きることへと連なっている道なのです。

- c. [原文] 「みやぎのの露ふきむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」
[谷崎] 「宮城野の露ふき結ぶ風のおとに
小萩がもとをおもひこそやれ」

[Waley] Emperor: "At the sound of the wind that binds the cold dew on Takagi moor, my heart goes out to the tender lilac stems."

(直訳) たかぎ野の冷たい露を束ねる風の音を聞くと、私の心はあの若いライラックの茎に思いが寄せられます。

[Seidensticker] "At the sound of the wind, bringing the dews to Miyagi Plain,
I think of the tender hagi upon the moor."

(直訳) 宮城野へと露を運んでいく、あの風の音を聞くと、私は、あの荒れ野に育つ、まだ若い萩を思い浮かべます。

[Tyler] "Hearing the wind sigh, burdening with drops of dew all Miyagi Moor,
my heart helplessly goes out to the little hagi frond."

(直訳) 風のそよぐ音が聞こえ、宮城野のすべてを露で苦しめ、私の心はどうすることもなく、あの小さな萩の葉へとよせられます。

d. [原文] 「鈴むしの声の限りを尽くしても長きよあかずふる涙かな」

[谷崎] 「すず虫のこゑの限りをつくしても
ながき夜あかずふる涙かな」

[Waley] Daughter: "Ceaseless as the interminable voices of the bell-cricket, all night till dawn my tears flow."

(直訳) いつまでも続く鈴虫の鳴く音のようにやみそうもなく、夜明けまでずっと夜通し私の涙は流れます。

[Seidensticker] "The autumn night is too short to contain my tears
Though songs of bell cricket weary, fall into silence."

(直訳) 秋の夜は、私の涙を止めるにはあまりにも短すぎます。
鈴虫の鳴く音が、疲れ果てて、静かになっても。

[Tyler] "Bell crickets may cry until they can cry no more, but not so for me,
for all through the endless night my tears will fall on and on."

(直訳) 鈴虫は、もう鳴くことができなくなるまで鳴くでしょう。しかし、私にとってはそうではありません。と言いますのも、終わりのない夜通し、私の涙は止まることなく落ち続けるでしょう。

e. [原文] 「いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露おきそふる雲のうへ人」

[谷崎] 「いとどしく虫の音しげき浅茅生に
露おきそふる雲のうへ人」

[Waley] Mother: "Upon the thickets that teem with myriad insect voices falls the dew of a Cloud Dweller's tears."

(直訳) おびただしく聞こえる虫の音で満ちている茂みに、雲の上に住んでいる人の涙のつぶが落ちてきます。

[Seidensticker] "Sad are the insect songs among the reeds.
More sadly yet falls the dew from above the clouds."

(直訳) 悲しいのは、葦の茂みから聞こえる虫の音
でも、もっと悲しいさまで、露(涙)が雲の上から落ちてきます。

[Tyler] "Here where crickets cry more and more unhappily in thinning grasses
you who live above the clouds bring still heavier falls of dew."

(直訳) 薄くなりつつある草の中で鈴虫がだんだんと悲しく鳴くここで、
雲の上に住むあなたは、水滴(涙)を今までにもましてたくさん降らせませす。

f. [原文] 「荒き風ふせぎしかげの枯れしよりこはぎがうへぞしづごゝるなき」

[谷崎] 「荒き風ふせぎし蔭の枯れしより
小萩がうへぞしづこころなき」

[Waley] Mother: "a poem in which she compared her grandchild to a flower which has lost the tree that sheltered it from the great winds."

(直訳) 彼女が、自分の孫を、強い風からそれをかくまっていた木を失った花に例えた詩。

[Seidensticker] "The tree that gave them shelter has withered and died.

One fears for the plight of the hagi shoots beneath."

(直訳) 萩の若芽をかくまっていた木が枯れて死んでしまった。

その下にある萩の若芽のありさまが心配になります。

[Tyler] "Ever since that tree whose boughs took the cruel winds withered and was lost my heart is sorely troubled for the little hagi frond."

(直訳) その大きな枝が荒れ狂う風を防いでいた木が枯れてなくなってしまったからというもの、

私の心はその小さな萩の葉を思っては、ただただ苦しいばかりです。

g. [原文] 「尋ねゆくまぼろしもがなつてにてもたまのありかをそこと知るべく」

[谷崎] 「尋ね行くまぼろしもがなつてにても

^{たま}魂のありかをそこと知るべく」

[Waley] Emperor: "Oh for a master of magic who might go and seek her, and by a message teach me where her spirit dwells."

(直訳) ああ、彼女を探しに行つて、そのメッセージで彼女の魂がどこに住んでいるか私に教えてくれる魔術の達人がいたらなあ。

[Seidensticker] "And will no wizard search her out for me, That even he may tell me where she is?"

(直訳) そして、どの魔術師も、私のために彼女を見つけ出そうとはしないのでしょうか。

まさしく、彼女がどこにいるのかを、私に教えようとするために。

[Tyler] "O that I might find a wizard to seek her out, that I might then know at least from distant report where her dear spirit has gone."

(直訳) ああ、魔術師を見つけて、彼女を探し出すことができたなら。そうしたら、少なくとも、

遠く離れた噂からでも、彼女の愛らしい魂が行ってしまったところがどこなのか知ることができるのに。

h. [原文]「はねを並べ、枝をかはさむ」

[谷崎]「天にあっては比翼^{ひよく}の鳥、地にあっては連理^{れんり}の枝」

[Waley] Emperor: "the vow that their lives should be as the twin birds that share a wing, the twin trees that share a bough."

(直訳) 彼らの命は、一つの羽を分かち合う二羽の鳥のように、そして一本の枝を分かち合う二本の木のようにあるはずだという誓い

[Seidensticker] "In the sky, as birds that share a wing,
On earth, as trees that share a branch."

(直訳) 空では、一つの羽を分かち合う鳥たちのように、地上では一つの枝を分かち合う木々のように。

[Tyler] "Morning and evening he had assured her that they would share a wing in flight as birds or their branches as trees,"

(直訳) 朝な夕な、彼は彼女に、彼らは飛ぶときは鳥のように羽を分かち合い、あるいは木のように枝を分かち合うと約束しました。

i. [原文]「雲の上も涙にくるゝ秋の月いかですむらむあさぢふのやど」

[谷崎]「雲のうへも涙にくる秋の月

いかですむらん浅茅生^{あさぢふ}のやど」

[Waley] Emperor: "the thought, with what feelings she had watched the sinking of the autumn moon: 'for even we Men above the Clouds were weeping when it sank.'"

(直訳) どんな気持ちで、彼女は秋の月が消えていくのを見ていたのでしょうか。「と申しますのも、私ども、雲の上のものでさえも、それが消えたら涙を流し悲しみますから」。

[Seidensticker] "Tears dim the moon, even here above the clouds.
Dim must it be in that lodging among the reeds."

(直訳) 涙が月の光を薄くする、たとえ、雲の上のここでも。葦の茂みの中のその住まいの中では、なおさら暗いはずですね。

[Tyler] "When above the clouds tears in a veil of darkness hide the autumn moon,
how could there be light below among the humble grasses?"

(直訳) 雲の上で暗闇の中の涙が秋の月を隠すとき、その下の、このつつましい草に間にどうして光がありえましょうか。

j. [原文] 「いときなきはつもとゆひに長きよを契る心は結びこめつや」

[谷崎] 「いときなき初元結に長き世を
ちぎる心はむすびこめつや」

[Waley] Emperor: "a poem in which he prayed that the binding of the purple filet might symbolize the union of their two houses."

(直訳) 紫の網目の結びが、彼らの二つの家を結びつける印となりますようにと彼が祈った詩

[Seidensticker] "The boyish locks are now bound up, a man's.

And do we tie a lasting bond for his future? "

(直訳) 少年の巻き毛は、今しっかりと束ねられ、成人のものとなりました。

そして、私たちは彼の将来のための末永く続く絆を結びますか。

[Tyler] "Into that first knot to bind up his boyish hair did you tie the wish

that enduring happiness be theirs through ages to come? "

(直訳) 彼の少年らしい髪を束ねるための、その最初の結び目の中に、あなたは、
絶えることのない幸せが、今後も末永く彼らのものであって欲しいという願いを
結び込みましたか。

k. [原文] 「結びつる心も深きもとゆひにこきむらさきの色しあせずは」

[谷崎] 「むすびつる心も深きもとゆひに
こきむらさきの色しあせずは」

[Waley] Minister: "answered him that nothing should sever this union save the fading of the purple band."

(直訳) 紫の絆が色あせることがなければ、この連帯を不和にするようなものは何もありません
と、彼に答えた。

[Seidensticker] "Fast the knot which the honest heart has tied.

May lavender, the hue of the truth, be as fast."

(直訳) 正直な心が結ぶ結び目をしっかりと、紫のラベンダーよ、忠誠(婚約)の色よ、
結び目と同じようにしっかりと。

[Tyler] "In that very mood I tied his hair with great prayers bound henceforth to last,

just as long as the dark hue of the purple does not fade."

(直訳) まさにその気持ちで、私は、これから続いていくために結びつけながら、
大きな祈りとともに、彼の髪を結びました。ちょうど、紫の色の濃さが色あせない限りは。

(2)「若紫」の巻より ウェイリーとサイデンスティッカーの訳の比較

(資料作成：江藤裕之先生)

[オリジナルテキスト]

藤壺の宮、悩みたまふことありて、まかでたまへり。上の、おぼつかながり、嘆ききこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、かかる折だにと、心もあくがれ惑ひて、何処にも何処にも、まうでたまはず、内裏にても里にても、昼はつれづれと眺め暮らして、暮るれば、王命婦を責め歩きたまふ。いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、現とはおぼえぬぞ、わびしきや。宮も、あさましかりしを思い出づるだに、世ととももの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深く思したるに、いと憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深く恥づかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させたまはぬを、「などが、なのめなることだにうち交じりたまはざりけむ」と、つらうさへぞ思さる。何ごとをかは聞こえ尽くしたまはむ。くらぶの山に宿りも取らまほしげなれど、あやになる短夜にて、あさましう、なかなかなり。

見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちにやがて紛る我が身ともがな
と、むせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

世語りに人や伝へむたぐひなく憂き身を覚めぬ夢になしても
思し乱れたるさまも、いと道理にかたじけなし。命婦の君ぞ、御直衣などは、かき集め持て来たる。

[谷崎訳]

藤壺の宮がお患いなされて、お里へお下りになりました。お上が気をお揉み遊ばしていらっしゃる御様子も、まことに
おいたわしゅうお思いになるのですが、せめてこういう折にでもと、心も空にあくがれ惑うて、どこへもここへもお出
ましにならず内裏でも御殿でも、昼はつくづくと物思いに耽り給うて、日が暮れると王命婦を追い廻しつつお責めになり
ます。どのように計らったことなのか、たいそう無理な首尾をしてようようお逢いになるのですが、その間でさえ現
とは思えない苦しさです。宮も、浅ましかったいつぞやのことをお思い出しになるだけでも、生涯のおん物思いの種な
ので、せめてはあれきりで止めにしよう、固く心におきめになっていらっしゃるに、またこのようになったこと
がたいそう情なく、やるせなさそうな御様子をしていらっしゃるのですが、やさしく愛らしく、といて打ち解けるで
もなく、奥床しく恥かしそうにしていらっしゃるおん嗜みなどの、やはり似るものもなくしていらっしゃるのを、ど
うしてこうも欠点がありにならないのであろうかと、君はかえって恨めしいまでにお思いになります。積るおん思いの
数々も、何として語り尽くせましようぞ。闇部の山におん宿りもなさりたそうなのですが、あいにくの短夜で、なまなか
お逢いにならない方がましなくらいでした。

見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちにやがて紛る我が身ともがな

(たまたまお目にかかりましても、再びお逢いする夜はなさそうでございますゆえ、今夜の夢の
中にこのまま私は消えてしまいとうございます)

と、涙に咽せ返り給う有様も、さすがにお可哀そうなので、

世語りに人や伝へむたぐひなる憂き身を覚めぬ夢になしても

(あなたは夢と言われましたが、またとないほど辛い私の身を、たとい永久にさめない夢にする
にしましても、後の世の語り草に人が伝えはしないでしょうか)

思ひ乱れていらっしゃる御様子も、まことに道理で、畏れ多いのです。命婦の君が、おん直衣などを取り集めて持って
参ります。

[Arthur Waley, *The Tale of Genji* (1926-33)]

About this time Lady Fujitsubo fell ill and retired for a while from the Palace. The sight of the Emperor's grief and anxiety moved Genji's pity. But he could not help thinking that this was an opportunity which must not be missed. He spend the whole of that day in a state of great agitation, unable whether in his own house or at the Palace to think of anything else or call upon anyone. When at last the day was over, he succeeded in persuading her maid Omyobu to take a message. The girl, though she regarded any communication between them as most imprudent, seeing a strange look in his face like that of one who walks in a dream, took pity on him and went. The Princess looked back upon their former relationship as something wicked and horrible and the memory of it was a continual torment to her. She had determined that such a thing must never happen again.

She met him with a stern and sorrowful countenance, but this did not disguise her charm, and as though conscious that he was unduly admiring her she began to treat him with great coldness and disdain. He longed to find some blemish in her, to think that he had been mistaken, and [to] be at peace.

I need not tell all that happened. The night passed only too quickly. He whispered in her ear the poem: 'Now that at last we have met, would that we might vanish forever into the dream we dreamed tonight!' But she, still conscience-stricken: 'Though I were to hide in the darkness of eternal sleep, yet would my shame run through the world from tongue to tongue.' And indeed, as Genji knew, it was not without good cause that she had suddenly fallen into this fit of apprehension and remorse. As he left, Omyobu came running after him with his cloak and other belongings which he had left behind.

[直訳]

その時分、藤壺の宮は病気になる、しばらくの間、宮廷から退きました。天皇の悲しみと心配の姿が源氏の同情を誘いました。しかし、彼（源氏）は、これは絶対に逃してはならない絶好の機会であると考えないわけにはいかなかったのです。彼（源氏）はその日一日を、大変気持ち揺れた状態で過ごし、家にも宮廷にも他のことを考えることもできず、また誰を訪ねることもできませんでした。その日もついに暮れようとしたとき、彼（源氏）は彼女（藤壺の君）の女官である王命婦に伝言を受けとることを説得することに成功しました。その女（王命婦）は、二人の間でのどんな形の連絡でも非常に軽率なことであると見なしていましたが、彼（源氏）の顔が何か夢の中で歩いている人の顔のように変に見えましたので、彼（源氏）が可哀想になり、そして行きました。藤壺の君は、彼らの以前の関係を邪悪であり、そしてひどく恐ろしいものと思い返していました。そして、その思い出は彼女（藤壺の君）にとり、絶え間のない苦痛でした。彼女（藤壺の君）は、このようなことは二度とは起こってはいけないと固く心に決めていました。

彼女（藤壺の君）は彼（源氏）に、険しく、そして悲しげな顔つきで会いました。しかし、このことは彼女の魅力を覆い隠すことはありませんでした。そして、彼（源氏）が彼女（藤壺の君）に心からすばらしいと思っていることを意識しながらも、彼女（藤壺の君）は彼（源氏）をととても冷たく軽蔑して扱い始めました。彼（源氏）は彼女（藤壺の君）の中になにか欠点を見つけることができればいいと強く思うことで、彼（源氏）が誤解しているのだと思い、そして平安な心になることをこいねがったのです。

私は、そこで起こったことすべてをお話する必要はありません。その夜は、とても残念なことに過ぎ去るのが早かった。彼（源氏）は彼女（藤壺の君）の耳元で歌をささやきました。「ついに、今、私たちは会いました。このごに及んでは、今夜見る夢の中に永遠に消えてしまいたいくらいです。」しかし、彼女は、まだ、気がとがめていました。「永遠の眠りの暗闇に隠れたところで、私の恥は口から口へと世間を駆け巡るのでしょう。」そして、本当に、源氏が知るように、彼女（藤壺の君）がこのように突然不安になり自分を責めるようになるのも理由のないことではありませんでした。彼（源氏）が去り、王命婦は彼（源氏）が忘れていった外套とその他の持ち物をもって彼を追いかけました。

[Edward G. Seidensticker, *The Tale of Genji* (1976-77)]

Fujitsubo was ill and had gone home to her family. Genji managed a sympathetic thought or two for his lonely father, but his thoughts were chiefly on the possibility of seeing Fujitsubo. He quite halted his visits to other ladies. All through the day, at home and at court, he sat gazing off into space, and in the evening he would press Omyobu to be his intermediary. How she did it I do not know; but she contrived a meeting. It is sad to have to say that his earlier attentions, so unwelcome, no longer seemed real, and the mere thought that they had been successful was for Fujitsubo a torment. Determined that there would not be another meeting, she was shocked to find him in her presence again. She did not seek to hide her distress, and her efforts to turn him away delighted him even as they put him to shame. There was no one else quite like her. In that fact was his undoing; he would be less a prey to longing if he could find in her even a trace of the ordinary. And the tumult of thoughts and feelings that now assailed him he would have liked to consign it to the Mountain of Obscurity. It might have been better, he sighed, so short was the night, if he had not come at all.

“So few and scattered the nights, so few the dreams.

Would that the dream tonight might take me with it.”

He was in tears, and she did, after all, have to feel sorry for him.

“Were I to disappear in the last of dreams

Would yet my name live on in infamy?”

She had every right to be unhappy, and he was sad for her. Omyobu gathered his clothes and brought them out to him.

[直訳]

藤壺は病気で、彼女の家族の家に帰りました。源氏は、彼（源氏）の寂しそうな父に対し同情の気持ちを何とか一つ二つ持とうとしました。しかし、彼の考えは主に藤壺に会う可能性についてのものでした。彼（源氏）は、他の女性のもとを訪ねることをすっかりやめました。一日中、家にいても宮中にあっても、彼（源氏）はぼんやりとして座っていました。そして、夕方、彼（源氏）は王命婦に、彼（源氏）の使いをするよう懇願しようと思いました。彼女（王命婦）がどのようにそれをしたか（使いを果たしたか）私は知りません。しかし、彼女（王命婦）は二人が会えるようにしました。こう言わなければならないのは寂しいことですが、彼（源氏）が前にしつこく言い寄ってきたことは、ほんとうに困ったものでしたが、それはもはや現実のようではありませんでした。そして、そのこと（源氏のもくろみ）が成功してきたことを考えるだけで、藤壺にとっては苦痛でした。次に会うことはないだろうと決めていましたので、彼女（藤壺）は彼（源氏）を彼女（藤壺）の目の前に再び発見してショックでした。彼女（藤壺）は彼女（藤壺）の嘆きを隠そうとはせず、彼（源氏）にそっぽを向こうとする彼女（藤壺）の努力は、それ（その努力）が彼（源氏）を惨めな立場に追いやろうとも、彼（源氏）を喜ばせたのでした。まったく彼女（藤壺）のような人は他にはいません。この事実、彼（源氏）の破滅がありました。つまり、彼（源氏）が、彼女（藤壺）にありふれたものを見出すことができれば、彼（源氏）はここまでいいこがれることの餌食にはならなくてすんだのかもしれない。そして、今や彼（源氏）を襲う心や気持ちの動揺 彼（源氏）は、それ（動揺）を「暗い山」に預けてしまいたいほどでした。夜はこんなにも短い、むしろ、ここに来なかったほうがよかったのかもしれないなあ、と彼（源氏）はつぶやきました。

（お目にかかれる）夜はほとんどなく、またそのような夢もほとんどありません、

ですから、今夜の夢がその中に私を連れて行ってはくれないでしょうか

彼（源氏）は目に涙を浮かべていた。彼女（藤壺）は、結局、彼（源氏）のことを可哀想に思わなくてはならなかった。

もし、私が、夢の中で消えることができても、

しかし、私の名前はずっと汚名にさらされながら残るのでしょうか

彼女（藤壺）が不幸であるのは当然でした。そして、彼（源氏）は彼女（藤壺）のことが悲しくなりました。王命婦は彼（源氏）の服を集め、彼（源氏）のところに持っていきました。